聖き本化の涙に疎くなつたのは慨くべきである、宗教家の天職を忘れた大罪人である。

崇拜し奉る本化大聖の御一代は永へに此の迷雲を開拓して誤まれる、宗教家の手本である。

聖き涙、私共は此の尊い、聖い、意義ある涙に咽ぶやうであつて欲しい、そして一日も此の聖い涙が、王法と佛法と冥合し四海妙典に同歸して、遠くば本佛の御素懷、近くば本化大聖の大志が現實されて、上下萬民隨喜の涙となるやうにしたい

聖き涙の底には魔するやうな大なる力がある。

聖誕七百年に際して
世人に訴ふ

高瀬教闡

凡そ此の天地間に介在せる、ありとあらゆる生物には、病無き能はず、況して四百四病の器とも云はれて居る我我人間の身の上に就ては、言を待たざる所なれば、此の集團によりて構成されたる國家なるもの、又病無きを得ず。我々人間の病に就き考へ見んも、其病質によつて、普通一般の所謂病と稱するものと傳染性を有する病とに別れ、此の二者を比較し其病質の何れが恐ろしく何れが害毒の甚大なるかは云はずもがなにて、コレラ、ペスト、肺結核等の如き傳染病は他の病氣に比して如何に危險たるかは論を待たず、彼の病菌に一度襲はれんか終に致命傷たるを免がれず。胃腸心臓等の如き病も共に恐るべきは相違なきも其異なる點や、その人一人に止まれど、傳染病たるや、唯單に一個人を倒すに止まらず猛烈なる勢を以て四方に傳播し、其害たるや、實に戰慄すべきこと、流行性感冒の爲めに倒れたる數、前後五箇年間に亘る世界の大動亂に於ける戰死者（七百萬人と稱せらる）のそれよりも、僅かの短日月に於ける惡性流行感冒による死亡者の多きを算せしは、既に世人の知る所にして、殊に外國の或市の如き其人口の一割に及ばんとの慘憺たるに到つては、戰慄せざるを得ず。故に誰人も傳染病患者と云ふを

知らば、各自に於ても要心し、國家に於ても豫防の方法を講じ、患者の隔離や衞生部警察署等俄かに大活動を始め、新聞は盛んに大書して國民に警告をなすなり。

さて國家の病にも亦自ら此の二種あるを記憶せざるべからず、我々日本國民たる者、自己の身体の大切なるを知ると同時に我國体の何たるかを忘るべからず。我々一身の血潮の中には、我々祖先幾十代の血潮が流れ、一個の身体は父母に依り、父母は祖父母によりて生れ、斯くして祖先傳來の血潮は過去現在未來と三世に通ふものなれば、我國は天照太神國を肇め給ひてより茲に數千年、所謂教育勅語の「我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠」にして、天照太神正に我國を創建し給ふに際し、天穐無窮の詔勅を下し給ひ、畏れ多くも皇室を大家に戴く此の一大家族を成し、祖先には玉なす御手に劍を執り、三韓を膺懲し給へる神功皇后あり日の出づる天子日の沒する天子に致すと、我國の威光を示されたる聖德太子あり、又彼の歐亞大陸に袴がる大國を指して小蒙古と呼び、闊浮統一の偉大を高唱し給へる日蓮聖人あり。此の永遠無窮にして神聖なる國家に住し、光榮ある祖先を有する日本國民よ、總てを西洋の新奇に附和雷同し、我が國体も歴史も顧みず世界の大勢をも洞察せず唯盲目的に新說を鼓吹するを以て新らしがり、本邦固有の美德を陳腐として嘲けるが如き、國家社會に害毒を流し、遂には天下を殺し國基を危くする險惡の氣分あるを對岸の火と思ふ勿れ。今や世界各國を其毒牙に倒さんとする恐るべき傳染病の既に露國を倒し、早くも東洋の天地を赤化せしめんとしつゝあり。斯る精神的傳染病流行の根元たるや、那邊に存するかは詳かに知る所にあらずと雖も、そが戰後に於ける時代思潮の大なる影響をなす所たるは言ふまでもなく、而して其感染せんとするは、心身に大なる缺陷あるにあらざるや曰くそは近來都會人士中、特に社會的地位を有する智識階級者の腦中には、所謂我儘勝手のデモクラシーなる思想浸み込み、恰かも元品の無明となり

それより生ずる所有、非國民的行動に諸方面に波動を及ぼし、之を癒すに良醫無きを如何すべき。利已的見解の元に大和民族の先天的精神を沒却し輕佻浮薄賣名射利の軍、前後左右を顧みず横行を極め、脅迫威嚇の態度に出で、群集を頼みて同盟罷業、サボタージュ、示威運動等の、世界的に荒れ廻る流行は遂に各地に其猖獗を見るに到り、人心をして淘々たらしむる忌はしき思想の傳播と共に國体觀念の廢頽せる所以のものは我國教育の罪ならんも、又國民が宗教の撰擇を過つに基因す。嘗ては明治時代に於て、胸中に社會主義を懷ける傳來思想の炎は、反逆事件の行爲の煙と立ち登れり誠に思想は行爲の母なり、瞋むべきは行爲にして恐るべきは内に潜める危險思想なり。

我國の現代思潮を觀ずるに、黑船の渡來により世界に覺醒せる、過去五七十年の故國の過程は、云ふまでもなく燦然たる物質文明の旺盛を示したるだけ、精神的の社會政策に認むる缺陷を指適さるべきは否む能はず、徒らに世界思潮の蠢動して理論と實際とを混同無差別して、社會道義を破り金甌無欽の國体に危害を加へむとするマルクスの社會觀念に心醉し、虛無思想の實行を期せんとするクロポトキンの社會革命に雷同し、依つて毛唐が鷄肉の血を啜らんとするが如きは嘆ずべきに非ずや。彼等基督教徒は博愛を口にして人種差別の排日を煽動し、神はゴットあるのみと叫び、己が客分の身をも顧みず其國に居て而も大君を呼ぶに猶ほ罪の子とは何事ぞ、國民尊崇の神靈を無視し我國の美德たる祖先崇拜は野蠻宗教なりとは何のたわけぞ、如何に科學萬能を以て生命とする彼等なりとも、我國体を無視し宗教に事よせて危險思想を教養せしむるは、國家の傳統を紊し、國家の組織を攪亂する惡魔にして、國民の福利、國家の靜謐、社會の秩序を振盪して顧みぬ如きは、斷じて許容すべきに非ず。

宗教により國も榮へ又宗教によりて國も亡ぶ、「日蓮によりて日本國の有無はあるべし」と、天上天下介然孤立の身を以て滿天下の僧俗を敵とし

て折伏の法鼓を鼓らし、本化上行の化身と自覺したる信念は、如何なる迫害にも忍辱し、眞理の追及と國家の意志希求の立正安國の下には、秋霜烈日峻嚴一歩も苛責せず、閻浮一統の天業を建設すべく「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」と國家開眼に點睛し、小蒙古御書には「此度蒙古軍の征め寄するとも、日蓮が弟子檀那にして果の意志に逆りてまで助言だにするものあらば、師檀の契りを斷つべし」との意味を以て滿天下に嘯ける志向の高邁と「孝子慈父の王敵となれば父を捨て、王に參るは孝の至りなり」と、人の子に順逆正理の大義を訓諭して、悔ゐざる國家奉仕は、不退轉法輪の權化として、三世に通ずる社稷眞人の典型を示し給ふ。實に今より七百年の昔、日本國が生み出したる聖日蓮は、クリストが如き博愛正義の立脚地を認容せるに非ず、マホメットの如き武斷壓制を以て宗教價値に試金したるに非ず、孔夫子の首唱したる治家修身の現實教を以て治國平天下を宣傳したるにも非ず、況んやルーテルや釋鸞の機界的二段三段の人物に比するが如きは不倫にして、本化上行の再來たる聖人は、三身具足の本佛にあらざれば「爾前迹門の釋尊なりとも物の數ならず」と蹴散らし「日蓮が門下は臆病にては叶ふべからず」と叱咤し、本地攝伏の一大旗織を翻へして、「漢土月氏にも勝れ八萬の國にも超えたる國ぞかし、本門の戒壇此の國に建つべし」と、建國以來の道の國、神の國たる佛國土に住し、久遠の生命を有する此の國を基礎とし、五五百歳の長き闇を照らすべく、一天四海皆歸妙法の法華經弘通に、「日本乃至一閻浮提一同に本尊とすべし」と宣傳し、破邪顯正治國安民の實現を擧げん爲め、不惜身命獅子吼遊ばされたる、世界的不出世の巨人にして、宗教にも德教にも、一切人事の規範に超越高踏し給ふ、偉大なる靈格者なり。故に一日蓮は何れの宗の元祖にもあらず」と。

嗟!! 斯かる偉傑日蓮の降誕七百年に際したる我等國民は、維新に覺醒せる明治世代の唯物文明の

典型に對し、大正維新の所謂改造期に當り心得ふべき事は、彼の過激、無政府、共產主義の如きは、世の不逞不平不滿の洛伍者の說に外ならずして、如何に巧妙なる理窟を附會するも、到底正しき國家社會に許容すべきに非ず、幾千萬世を經るとも斯かる主義主張は正法の國に實行さるべきに非ず こは亂世の餘波たる强盜山賊の類にして、唯百鬼夜行の醜態慘狀を演じ、人類をして不幸に陷らしむに過ぎざるのみ。されば世界文化の偉業に貢獻すべく、我れの進んで爲すべきは、猛火の勢を以て風靡せんとする過激なる傳染病の退治にあり。こは正しく是好良藥の法華經の色讀日蓮が「根本の信」を以て、不惜身命の決定心に住し「二陣三陣」の旗頭の下に、末法萬年廣宣流布の實現を期すべきは正に此の時にあり、皇國の爲め大君の爲め義勇以て公に奉ずべき亦此の時なり。日本國民として久遠の生命ある國家に生れたるを喜ぶと共に、現代思想界の煽動的動搖に對し、我等が意志を敎示し給ふ「日蓮先駈けしたり和殿原二陣三陣續け」との、御聖訓に添へ奉るの覺悟を以て、日蓮が一門は精神的生誕の赤誠を披瀝して、聖誕七百年の千載一遇の好機をとらへ紀念するはさることながら、本朝唯一無二の偉大なる人格と、嵩高なる國家觀念の敎訓に見て、社禮報恩に奉答するは、蓋し亦國家使徒の本然なり。然かも大正十年は、精神冥々の裡に相通ずる日本佛敎の開祖、法華經宣傳の大恩人、國家主義の鼓吹者たりし、聖德太子の一千三百年と、傳敎大師千百年の忌辰なるのみならず、更に敎主釋尊の御降誕二千九百五十年の嘉辰に迎遇する、我等が紀念を新にすべき多幸の年なるに於てをや。（大正十年正月十五日稿）

奉迎七百年聖誕

結城瑞光

戰後の世界は政治敎育或は藝術宗敎の各方面に混沌たる思潮充滿して人心の動搖、世界の趨勢は小天地に跼蹐して人類の安寧を防ぐ、吾人等は如是邪想に對して飽く迄制肘し實際的、價値的方面